

【随筆】

私の南極事始め —長き半生を顧みて—

吉田 榮夫

I はじめに

1955年11月、日本は国際地球観測年（IGY：1957/58年）に計画された南極国際協同観測に、唯一の敗戦国・唯一のアジアの国として参加することを閣議決定で決めた。その前年であったか、お茶の水女子大から吉川虎雄先生が東大地理学教室に異動され、学術会議で関与されていた多田文男教授を助けて南極観測準備の実質的なお手伝いをされていた。

当時、大学院修士課程院生として八ヶ岳火山などの勉強をしていた筆者に、吉川先生が「貴方は南極に行ってみる気はありますか。」と声を掛けて下さった。南極といえば日本では1911/12年の白瀬探検隊だけの未知の世界。IGYは1958年で終わる、帰ってきたらまた火山をやればよい。「是非お願いしたい。」と申し上げた。

ところが南極観測は半世紀を越えて続けられ、筆者もお茶大を含むあちこちの大学や研究所に奉職させて頂きながら、皆さんに支えられていまだに南極についてのお手伝いを続けることになったのである。

II 最初の冬季訓練

1956年1月から2月に掛けて、日本の南極観測参加に火を着けたとされる朝日新聞社の矢田喜美雄さんが責任者となり、北海道網走近くの汽水湖の濤沸湖湖水上に日本初のパネル組立て式の小屋を建て、冬季訓練を行った。気象学や超高層物理学などの前半の班と固体地球物理学や地質学・地理学など後半の班に分かれて、やがては観測隊員となるかもしれない人達が参加した。

筆者はその中で最年少者として、地理学分野担当吉川虎雄・戸谷洋の驥尾に付して参加させて頂いた。戸谷先生はなんと、筆者が1948年最後の旧制都立高等学校理科に入学、学制改革で1年間だけ「地質学入門」という教科書で、地質学を習った先生であった。戸谷先生は旧制浦和高等学校学生時代には山岳部に属していたが、吉川先生は旧制浪花高等学校学生時代は水泳部で活躍されたとのこと。筆者は旧制中学時代に軟式庭球で横浜市で優

勝していたが、この冬季訓練で初めてスキーを履いたのであった。

海岸で眺めたオホーツク海の張りつめた流氷は、輝いて美しかった。やがてここから南へおよそ25kmの川湯温泉まで、雪中行軍を行うこととなった。慣れないスキーを何とかこなし、必死で歩いた。川湯に到着すると夕食で懇親の会が開かれた。朝日新聞社の藤井恒男は堂々たる体躯で土俵入りを披露（彼は第1次越冬隊員となった）、吉川先生は旧制浪花高校水泳部で習い覚えた「田螺殿」を踊った。

濤沸湖訓練には、1953年南米高峰のアコンカグア登頂に成功した早稲田隊の関根教授と学生達数名が応援に来ていた。朝日新聞社はこの登山隊のスポンサーだったのである。川湯からの帰途のスキー平地滑走で、筆者はそのメンバーの1人と何とか負けまいと必死で滑った。訓練終了後、道南のニセコアンヌプリ近くのチセヌプリスキー場で仲間とスキーの練習をして、少しは斜面を滑れるようになった。

III 乗鞍岳訓練

国としての最初の訓練は、冬の乗鞍岳で行われることになった。1956年3月20日～26日、文部省（当時）を中心とする事務方関係者18名、7班に分かれた訓練者52名の大集団であった。

麓の鈴蘭小屋からシールを付けたスキーを履いて登山に掛かる。途中、電波研究所（当時）の大瀬正美に、初めて長い四角の黒い箱のようなトランシーバーの使い方を学んだ。やがて位ヶ原の小屋に到着して分宿、雪中でのさまざまな訓練。ある時、雪で半ば埋もれた小さな櫓を北海道大の楠宏から借りた「角田のピッケル」で起こそうとした国立科学博物館の村内必典が、このピッケルを折ってしまった。「ああ折れちゃった。」と言った村内を、楠はぶ然として眺めていた。

位ヶ原からさらに山頂へ向かうグループと、筆者のようにスキーの下手くそな者達に分かれ、後者は学習院大学の東大スキー山岳部OBである木下是雄教授の指導で

スキーを学んだ。やがて下山の日を迎え、急で狭い鳥居尾根を滑り降りる。瀧沸湖訓練で一緒だった立見辰雄は、鳥居尾根の下のやや平らなところで筆者が転ぶぞと周囲の人達に言って皆で見ていたところへ、筆者はかなりのスピードで尾根を滑降、皆の前でさっと回転して止まり、木下スキー教室の成果を見せたのであった。

IV 第2次越冬準備の日々

1. 北海道犬橇訓練に向けて

第1次観測隊が、リュツォ・ホルム湾のオングル諸島で苦闘している頃、筆者を含む地質学・地理学の地学関係者は北海道稚内に作られた犬橇訓練所で犬橇の訓練を実施することとなった。そして、その前にこのグループの統率役を務めた火山研究で世界的に著名な研究者久野久東大教授が、まず蔵王山にある東北大学青溪ヒュッテに寄って足慣らしをしようと提案された。久野先生は仙台の旧制第二高等学校出身者であった。そして、筆者は東大院生時代に久野先生の大学院ゼミに特別に受け入れて頂いたのであった。この蔵王での足慣らしに参加したのは、隊員候補関係では地質学分野の京都大学中沢圭二、北大木崎甲子郎、地理学分野の筆者であった。そして、当時東北大学理学部地理学教室で副手を務めていた藤原健蔵がお手伝いするというので同行した、（ほかにも東北大の助教授、また、久野先生の弟さんを含み、蔵王を越えて山形に向かうという同行者達もいた。）

藤原健蔵は筆者と専門分野が同じ。花巻の出身で、のち第4次また第8次越冬の筆者と交代して5次、9次で越冬、村山雅美隊長のもとで活躍した、また、彼は東北大学から広島大学教養部助教授として1963年に異動したが、筆者はそのあとを追うようにお茶の水女子大から広島大文学部地理学教室の助教授として赴任、種々お世話になった。

閑話休題、第2次南極観測の候補者3名と久野先生は、1957年2月蔵王から長駆犬橇訓練を行う稚内に到着、利尻島を望む台地の上にあるカラフト犬の犬小屋と一緒に建っている小屋に入り、訓練指導に当たる芳賀良一、犬橇を操る後藤（日本名を持っているが、青い眼のギリヤーク系の人）と合流した。犬橇は、第1次の副隊長兼越冬隊長を務める西堀栄三郎の要請によって北海道でカラフト犬を集めて編成を図ったものであり、北大農学部の犬飼教授がその衝に当たり、助手の芳賀が世話をした。芳賀は芳賀スキーという会社の一族である。

訓練は12頭で曳く大型の橇と5頭ほどで曳く小型橇各1台で、テントで寝泊まりしながら稚内から旭川まで10日ほどかけて走らせようという計画であった。この橇

は、1949/52年に昭和基地から西方1,600kmほど離れた沿岸にモードハイム基地を作り、初めて内陸600kmにわたり人工地震探査を行って大陸氷床の厚さを測定するなどした三国隊（ノルウェー・スウェーデン・英）が使用した橇をモデルにしたもので、その一つを国立極地研究所に展示してある。

訓練班のうち久野先生はお忙しいということで、2日間同行のあと帰京された。隊員候補者3名と指導者2名は、雪道となった道路を雪原となった天塩原野を右手に見ながら天塩山地西麓の川沿いにひたすら南下、やがて天塩山地を東西に横切って名寄に抜ける峡谷に入った。この道は深い軟雪の堆積で橇の通行に難渋した。そこで凍結した川面を橇で渡り、対岸に行ってみようということになった。

筆者は大型橇の最後部に乗り、鍬型のブレーキを踏んだり放したりする役目だった。先行する小型橇には5頭の橇犬を着け、芳賀が操縦していたが、もう少しというところで川面の氷が割れ、芳賀はドブンと峡谷の深い河中に転落した。幸い犬達は橇とともに氷上に残りなんとか向う岸に到着。筆者が後ろに取り付いていた大型橇も慎重に渡すことができた。岸辺には無人の小屋があり、その中で火を焚いてガチガチに凍った芳賀の衣服を乾かしたりした。

峡谷を出て名寄へ、この時気象観測をしていた筆者は最低気温の-32.2℃が太陽が出た直後に記録されたことを確かめた。あとは士別を経て旭川へ予定通り到着、旭川では陸上自衛隊駐屯地に泊めて頂き、翌日解散となり筆者はここから帰京した。橇犬達はおそらく稚内へ送られたことであろう。

2. 急ぎ足の第2次観測準備

1957年4月24日、第1次夏隊41名を乗せた「宗谷」は、随伴船「海鷹丸」とともに東京港日の出棧橋に帰着した。隊長永田武は第2次準備のためとして、「宗谷」山本航海長とともにケープタウンから空路3月29日帰国していた。第2次観測隊は永田武隊長、村山雅美副隊長兼越冬隊長のもと、本観測のためのさまざまな業務に追われた。

越冬隊20名中には、地質学の中沢圭二・木崎甲子郎の名前はなかった。公式記録に「地学・犬」とある筆者が、稚内犬橇訓練3名の中からどのような経緯で選ばれたのか分からないが、人工地震探査の村内必典が、筆者なら助っ人として使えると考えたのではないかと憶測できそうである。すでに第1次越冬隊に立見辰雄・菊池徹の二人の地質学者が越冬したためかもしれない。それはともかくとして、筆者はカラフト犬は連れて行かず、基地に

いる1次越冬隊が用いた犬達を使う予定で、まずはカラフト犬のための準備をしなけりななかつた。たとえば、首輪を抜いて係留場所から離れてしまう犬の首輪には、引っ張ると締まって抜けなくなるようにしたものがあつた。その購入に文部省の係官が付いてきてくれ、現金で調達したこともあつた。

3. 第2次観測 (本観測) の挫折

第1次観測 (予備観測) は、リュツォ・ホルム湾の北東湾口近くの東オングル島に昭和基地を建設、第1次越冬隊11名を残すことに成功したもの、帰途には「宗谷」がいわゆるビセット (海氷中に閉塞) されソ連船オビ号の救援を受けたこともあつて、第2次観測ではできるだけ早く流氷縁に到着したいとして「宗谷」の出航を早め、1957年10月21日東京港日の出棧橋から壮途についた。しかし、これが裏目に出たか、越冬隊を残すことができず失敗に終わった。この間の顛末を略述してみよう。

「宗谷」が南アのケープタウンを出航し昭和基地に向かったのは、1957年12月11日。12月20日には流氷縁に到着して氷状調査を開始したが、ブリザード (激しい雪嵐) に見舞われ、12月31日にはビセット状態に陥り、ここから40日間の漂流が始まった。筆者は船尾のわずかな水開きからの採水を手伝ったりし、そのうち、海底に座礁して動かないと思われる氷山の方位と距離をコンパスとレーダーで測定し、それから「宗谷」の漂流の距離と方向を定めることを始めた。この結果が、最初の南極に関する筆者の学術報告となった。この成果はのちに筆者が第16次観測で副隊長兼夏隊長を務めた際、観測船「ふじ」が帰途にビセットされた時、ビセットからの解放の予測に役立った。

第2次観測に話を戻すと、船上では幹部によるオペレーション会議がしばしばあつたようだ。観測担当者中では下から2番目の若輩の筆者は漏れ聞く立場だ。20名の越冬予定者の人数が次第に減らされていった。そうした中で「俺の学問の方がほかより大事なんだ。」という議論が横行するようになった。隊長の永田は筆者を隊長室に呼んで、「誰でも自分の学問が一番と思つてやっているんだ。」と弱小部門を一人で背負っている筆者を慰めてくれた。

1958年1月31日、東京の南極本部は米国に宗谷救援の依頼を行い、米はその要請を受け、沿岸警備隊所属で南極観測にも従事していた Barton Island 号が来てくれることになった。米国隊の主基地マクマードは、大陸を挟んでちょうど昭和基地と反対側にある。バ号を待ちつつ流氷域脱出を努力していた「宗谷」は、2月1

日推進器プロペラの1翼の3/4を折損、推進力は8ノットほどに落ちてしまった。バ号到着を待ちつつ我が隊は越冬予定人員を順次減らす案を作つていた。筆者はただ一人の犬樞担当とあつてか、9名までに減らされた中に入つていた。



図1 米国の南極観測に従事していた米国沿岸警備隊所属の Barton Island 号 (日本の要請に応じ救援にきた。筆者撮影)

2月7日、バ号と会合、そのあとについて「宗谷」は流氷域に進入し、2月11日やや広い平坦な海氷から搭載の小型機ビーバーを飛ばして第1次越冬隊11名を宗谷に収容、また、仔犬6頭、母犬1頭なども収容した。そしてここから雪上車で昭和基地に向かおうとしたが断念せざるを得なかつた。犬樞担当の筆者が行けない場合、犬を集めて使うことはできないので、成犬は繋いで置い



写真2 ビセットされた宗谷 (何とか動かしたい。いわゆる竹槍戦法。筆者撮影)

て欲しいとの要望もあって、15頭のカラフト犬は係留されたまま残置され、のち世界的に有名となったタロ・ジロの生き残りが生まれた。

そのうち、このままだとバ号もビセットされてしまう、ビーバー機は水上機でもあるので、海氷のない外洋から飛ばしては、ということになり7名まで減らした越冬隊で越冬する準備をして待機した。しかし、海況はビーバー機の飛行を許さず、「宗谷」の清水量がこれ以上留まれないという量となる1958年2月24日が到来。隊員全員を食堂に集めて越冬断念の、声涙ともに下る永田隊長の談話があり、「宗谷」はバートン・アイランド号と別れてケープタウンに向かった。

4. 終わりに

かくて筆者の「南極事始め」は南極の厳しさを存分に体験することで終わった。1958年に刊行された西堀榮三郎の『南極越冬記』（岩波新書）には、「これが探検というものだ。」の語がある。筆者は長年「探検から観測へ」という大学院生相手の講義をしてきた。しかし、南極の自然の厳しさは変わらないのである。

学生時代に直接ご指導いただいた先生方のほかは、敬称を省略させて頂きました。

よしだ・よしお（本学元教員）

国立極地研究所名誉教授・立正大学名誉教授

（2021年7月22日逝去）

The Beginning of My Antarctic Research : Looking back On My Long Life

YOSHIDA Yoshio